座談会 2018

親と保育者が共に育つ

中島久美子
臼井真名子
高橋ゆう子
宮里暁美
（司会）

宮里　今日は守永英子先生が書かれた「子ども・母親・保育者」という文章（この後の19～23ページに転載）を糸口にしながら、親と保育者の関係について皆さんでおしゃべりしたいと思います。私たちは、保育所・幼稚園・幼児教室・認定こども園と、それぞれ違う場所での保育経験をもっていますね。いろいろなお話ができそうで楽しみです。

さて、この守永先生の文章は、一九八五年と、もうずいぶん前に書かれたものですが、今読んでも、「あるある」と思ったり「ああ」と思ったりする箇所がいっぱいありました。皆さんはどうでしたか。

思い当たること

中島　私は私立保育園の園長をしていましたが、スタートは幼稚園の教員でした。

守永先生の論考の「若かった私は、一生懸命に、園でのY夫の様子を話し、親に協力を求めた」というところ。結局、翌日「昨日、ママに、ぼくの悪口言ったでしょ」って返ってきた。その日の保育の後で、どうしてそうなったのか、きっとよく振り返りをされたことだったのでしょう。ベテランになられても忘れられないことになって……。お母さんには「思ったよりうちの子、手がかかっているんだわ」とか「もうちょっとちゃんとできるはずなのに」と受け取られたのでしょうか。こう言えばよかった、と思うことは私も今で

中島久美子（南越谷保育園元園長）
高橋ゆう子（モンテッソーリアカデミア日吉代表。私立保育園契約保育士）
臼井真名子（ひなぎく幼稚園園長）
宮里暁美（文京区立お茶の水女子大学こども園園長）

もよくあります。懇談会でお母さんにどんなことが伝わるといいのかなと考えました。その子の一日を追ったような話をするのが普通ですが、保育の中のことを伝える要点は、食べることと昼寝と遊び、この三つのことだと新任者には助言しています。

臼井　幼稚園で園長をしている臼井です。私はまず、「親に協力を求める」ということが「ある、ある」と思いました。例えば、ある子どもが幼稚園でスモックのボタンが掛けられないというときに、そのことがどうして集団生活の中でこの子が困ることになるのか話します。その上で、幼稚園は集団の力を使って個を育てる所だけれども、おうちでは一対一でお母さんが教えてあげてくださいね、と親に協力を求める場合があります。それが「注文」だと思われたりもする。どうしても、できていないことを求めることが多いので。

もう一つ、保育者が「自責の念」をもつということも、思い当たることがたくさんあります。

自責の念

宮里　「自責の念」にかられるという言葉がとても印象に残りましたね。

臼井　言い過ぎたとか、言わなければよかったと思うことがある、この保育者としての自責の念という言葉に共感しました。こういうものをもっていていいのだなと。

高橋　私は、幼児教室の一対一で接する現場と、保育園という集団の中での一人を見るという二つの現場を持っています。いつも親御さんには、自分の育児が間違っていたと「自責の念」にかられないようにお話しする「イエス・バットの姿勢」を心掛けています。保育の中でお子さんに「そうね、でもこっちのほうがいいかもしれないね」と接するように、

▲臼井真名子氏

親御さんと話すときも、否定せず「そうですね、でもこのような方法もあるかもしれませんね」と、自身で考え、気づいていただけるように、ポジティブに対応することを大切にしています。親御さんの育児に対しての反省と、後悔は、違う効果を与えると思うからです。反省はポジティブな訂正のステップですが、後悔は「取り返しがつかない」ネガティブな感情で、子どもや自分を責めたりと、良い方向に行かない気がします。親が変わると子が変わる。「自責の念」にかられることなく、親子とも自己肯定感をもって、時には間違えながら、良い関係をもってほしいと、伝え方に気を配っています。

▲高橋ゆう子氏

宮里　保育者がどういうふうに家庭との関係を保つかということでしょうか。

高橋　保育は、子どもを挟んで保育者と保護者とが三角形をつくり、育ちあう関係だと思います。保育者だけが頑張ってもうまくいかない。お子さんと保育者の二人の関係に保護者が加わって三角形になっても、ご家庭と園、両方の環境でお子さんを理解し、協力関係をつくれないと難しいと思います。協力関係をつくることは大切だけれど、若い保育者には、時に、背負い過ぎて自身が壊れてしまわないようにも声掛けをしています。

一生懸命に

宮里　背負い過ぎず、頑張り過ぎないということと、さっき出してくださった守永先生の「若かった私は」「一生懸命に」と書いてあるところがつながりますね。保育者は、頑張りだすと、そこまで言わなくてもよいのにということまで保護者に言ってしまい、誤解を招くことがあるように思います。突きつけられ

たように思わせてしまったりして。こと保護者に関して言えば、保育者がどう頑張るのか、技が要るのかなあと思います。

臼井　「その時点では、事は順調に運んだかに思えた」ということも、思い当たることがあります。世間話みたいなものは、お母さんとも共有できるけれど、保育者はそれで何かを伝えたいがためにエピソードを話す。だから、何を話すかっていうところが重要だなと思います。そこに保育者とお母さんとのアレが出てくるのかなと。アレって何だろう？

高橋　信頼感とか。

中島　保育園っていうのは先生がたくさんいるからいろんな先生から話を聞けるのがいいのかなって。

宮里　一つの見方だけじゃなくて、いくつかの見方や考え方を示すことが大事なんですね。いろいろな先生がかかわるのもいいけれど、保育者が一人で伝えるにしても、見方を変えることはできるかもしれない。次の日はこんな姿もありました、とか。決めつけた言い方をしないように注意したいですね。

▲宮里暁美氏

卒園間近になって話してくれる

臼井　「私が原因を探し求めているときには、話してくれなかったことを、この時期になって話してくれたのは、卒業が近いという安心感からであろうか」というところ、すごくわかる。ありますよね。なんでなんだろう、いよいよ去ると思うと親が語り始める。

高橋　お母さんは、園の先生に対しては、困ったことを相談してきても「大丈夫です。解決しました」とか「私の思い過ごしでした」とか、本音を隠すことも少なくありません。まずは信頼関係をいかにつくっていくかが大

事です。幼児教室は違った立ち位置ですので、本音を話しやすいとよく言われます。保育園や幼稚園ですと、先生からどのように思われるか、私の育て方が悪いと思われないかと不安なようです。お子さんの成績イコール自分の成績みたいな。良い子で良い親と見られたい気持ちが働くのかもしれませんね。

臼井　先生と一緒に子育てをしているんだという実感が、なかなかもてないのかなあ。幼児教室とかだと、保護者と先生とで一緒に育ててるっていう感じになるのかしら。

高橋　他のお母さんに知られたくないとか。そういうことが意外とあるのではと思います。他の先生に知られたくないけれど、この先生だけに言いたい。でもみんなに知られるのは困る、とか。難しいといつも思います。

宮里　すごく大事だと思いますよね。子どもが小学生になると、いよいよ親の出番が少なくなる。親は毎日学校に行ったり先生と話したりはしないので。だから就学前の段階で、親は迷っていい、悩んでいいということを感じたり、子育ての悩みや迷いを誰かに相談すると少し楽になるという体験をしたりして小学生の親になってほしいと思います。皆さんはどう思いますか。

中島　卒園間近の六歳ですよね。急に子どもの力が伸びるときでもあるかなと思うのですけれど。運動会が終わったあたりから、クラスの中の一人ひとりが際立ってくる感じを私はいつも受けます。卒園が近くなって打ち明けられるって、今まではある程度しっかりしたお母さんでいなければいけないとか、いいお母さんでいようとか思っていたところが、少し出口が見えてきて、お母さんたちもほっとして話しやすくなるのだと思います。

▲中島久美子氏

高橋　お母さんが成長したのかもしれませんね。その時、保育者は、「お話ししてくださりありがとうございます」という感謝の気持ちで接することも大切です。お母さんが「話したことはよかった」と思うことで、今後小学校に進んでも、信頼を置ける先生には心の扉を開けるようなきっかけになるかと思います。倉橋惣三先生が、赤ちゃんが生まれたと同時に母親が生まれた、おめでとうございます（要約）と書いています（『育ての心』所収「母ものがたり」）。お母さんが年長さんのお母さんに成長した瞬間とも思えますね。

つながりができる工夫

臼井　幼稚園だとクラスサイズが二十人から三十人、基本的に担任の先生は一人。だから私は、お父さん、お母さん同士がつながりあってくれるような仕掛けみたいなものを幼稚園でつくれたらいいなととても思っています。

中島　保育園の保護者は忙しいのだけれど子どもの情報にはとても興味をもっていて、お迎えにいらっしゃるお母さん同士とか、いろんな行事とかでよくしゃべっています。

臼井　そう、よくおしゃべりはしていますね。それに今はSNSのいろいろなツールもありますから、自分の抱えている問題をお母さんがどこで誰にどう打ち明けて解決していけるかというのは、現代はさまざまかもしれません。でも、先ほどのエピソードのように卒園間近になって直接幼稚園の先生に言えたっていうのは一番よかったと思います。

宮里　わが子が成長したと思えたときに、過去の少しだめだった頃のことも言えるようになるってことがあるのかもしれませんね。その時はマイナスに見えたけど、その時にお母

さんが丁寧に向きあったからこそ今があるのだと思う、ということを伝えたくなります。また、わが子のことが見えていないのかもしれないと思われるお母さんへのアプローチとして、個人面談でお話ししてもあまり伝わらない。そうではなくて、お迎えの時間などに、子どものことを見ながら話すと伝わりやすいと感じたことがあります。あるいは、保育ボランティアのような形で保育にちょっと入ってもらうとか。遠足のときなどに、「お母さん先生」として保育に入ってもらうと、わが子の違う面やいい面が見えるということもあるように思います。皆さんの所では、そんなことありませんか。

臼井　私の幼稚園でも、五月に歩いて遠足に行くのですが、「見守り隊」というのがあります。角っこ角っこにいて見守っていただく、もっと危ない所は事前にお願いしておまわりさんにも出てきていただきます。あるお父さんは工事現場か何かの赤い棒を持ってきてくれて……。それと、「付き添い隊」というのも募ります。そういうのも保護者はみんな結構やりたいって言います。今日は自分のお子さんのことじゃなくて、みんなのお母さんでいてくださいって言うと、一生懸命それは先生の注文には協力する。（笑）

社会的な保育

宮里　そういう形での協力はしやすいように思います。幼稚園や保育園で親がボランティアとして保育に加わることが大切だと言われだしたのは、いつ頃からでしょうね。

臼井　私共の幼稚園は五十年くらい前からお母さんたちに給食当番をお願いしていました。今も続いています。

宮里　なぜ始めたのですか？

臼井　当時の園長が、お母さんと一緒に温かい給食を作って、子どもたちに手作りの味の

給食を出したいと思ったのです。もちろん栄養士もいます。かつてはお母さんたちもお料理をしていましたが、今は、調理はしないで、出来上がったものの盛り付けをして、わが子がいる保育室でみんなと一緒に給食を食べていただいています。片付け中心にしていきましょうとか、やり方はいろいろ変わってきましたが、味見はできるし、今のやり方は好評です。やり方は変わる中で、お当番のときは下の子を預けてきていただく、そのことだけは当初からずっと変わらずに続いていて、子どもを預かりあうというのが文化のように引き継がれています。が、最近は預け先に苦労するという声も多くなってきました。小さい弟妹を連れてでも参加できる人形劇とかクラブ活動もあります。クラブ内で、違う学年のお母さんが「いいよ、見ててあげるよ」って下のお子さんを預かりあう。それで子育てが楽になる。卒園式のときの預かり合いも幼稚園で始めています。

中島　卒園式とか、下のお子さんがいる方は大変ですよね。

臼井　式の間の託児も、ボランティアを募集します。

中島　そういうことを保育園がするようになったのもそんなに昔じゃない。やっぱり十年くらいかなあ。今は当たり前にやっているけれど。

臼井　ボランティアで託児してくださいって言うと何人か集まるのですけれど、子育て世代同士がボランティアで参加し、助けあうのがよいことだっていうのが表に出た発端というのはいつ頃ですか。

中島　社会的な保育。子どもは社会で育てる。例えば平日お休みのお母さんが美容院に行きたいんだけれども、そういうときは預かるかどうか、みたいな問題だったけれど、今は預かるのが当たり前ですね。

親が変わるとき

宮里　「ひがみ」のJ子ちゃんが変わったという記述がありますが、子どもが変わることで親が変わるっていうのは確かにある。時間はかかるし、その間、苦労するけれど。

中島　変わるチャンスはたくさんあるのかもしれないけれど、保育者がその一瞬に気づけなかったり……。運命の一瞬のことですから。

高橋　接していて、お母さんも成長したなって思う瞬間ってすごくあります。

中島　卒園式の後に謝恩会がありますね。そこでは「親も育ててもらってありがとう」っていうふうにおっしゃる方も多いんです。幼稚園でもそうですよね。

臼井　「楽しかったね」っていうのが一番うれしい。私は、「幼稚園のこと忘れちゃってもいい」って言うんですよ。幼稚園のほうが良かったって思いながら親子で小学校に行くのは、ある意味、私たちの力不足かなあと思って。前を向いて親子で進んでいってほしいなっていうことは思っています。

宮里　津守房江先生がお亡くなりになる半年前に附属幼稚園で講演をされました。その話の中で親へのまなざしについて語られたことが印象に残っています。お子さんとのかかわりがなかなか大変なお母さんがいて、いろいろアドバイスをするけれどもうまくいかない。それが二年後ぐらいに会ったときにすっかりいい感じになっていた。それを見て房江先生は、その人が闇の中にいるようなとき、自分の力で乗り越えるのを、私たちは待つことが大切だと言われていました。静かに、しかし力強く言われたその言葉が私の中に鮮やかに残っています。

それで、守永先生の次の

文章に私はちょっと引っかかりました。「子どもと母親の関係の中で、子どもを変えたいと思う時に、母親が変ることで子どもが変ってくるように、母親と保育者の関係の中で、母親を変えたいと思う時には、先ず、保育者自身が変ることが必要であろう」という部分です。守永先生は変えたいなんて思うことはあったのかしらと。

保育者が変わる

中島　守永先生の『保育の中の小さなこと 大切なこと』（フレーベル館）を読むと、先生は日頃の保育の中で必ずその日の振り返りをなさっている。しかも文章に起こして、すごく深く常に考えて書いている。そうすると、今までこうだったと思っていることもそうじゃないかもしれない、こうすればよかったということが出てきて、それは自分が変わるっていうことにつながっているのかなって。

宮里　変えたいといって変えているのではなく、自分が変わることでお母さんが変わっていくということが大切なんですね。重要なのは、自分をもっと変えていこうとすることなんですね。

臼井　さっきの津守房江先生の言葉に戻るんだけれど、私も今、四月にいろんなお母さんと出会って、この私の目の前にいるこのお母さんのことをまず信じて待つ。変わる力があることを信じる。自分が若い二十いくつのお母さんのことを信じているかなって思いましたね。房江先生の言葉に。信じられるといいんだろうなって。

中島　待つっていうのは放っておくっていうことではなくて、もっと積極的な意味がある。

宮里　やってみてできるかは場合にもよるし、その子の兆しが少し変わったからぴたっとくることもある。そこまでを見届けてあげられるアドバイザーがいたらお母さんも幸せにな

る。放っておくのではない。アドバイスをするけれども、その人がそれをしなかったからといってだめって言わない。

中島　変わるっていうのはただ認めるってことではなくて、自分の見方を変えていけるかということかしら。

高橋　私は、日々お子さんの言葉や活動、お母さんの言葉や悩みを受けることは、自分自身の学ぶ機会と思っています。問題に対し、本や資料に当たったり、いろいろな人の意見を聞いたりしながら考えることは自分を育ててくれます。若い先生たちも、そのような気持ちで、時にお母さんから苦情が来ることも自分に対する良い勉強の場とポジティブに捉えていくことで、成長できるのではないかと思います。

今後も長く役に立つこと

中島　お母さんから相談を受けて、保育者としてアドバイスするときにいつも心に置いていることは、子どもの将来、大きくなったときにも役に立つかということ。これを意識しているんです。守永先生の文章の「（子どもの課題を考え）それに対して、母親自身の果すべき役割を考える姿勢を、母親が持つことは、今後も、長く役に立つことである」。これをお母さんに言い続けるのが大切だと思います。

宮里　子どもが小さいときには、この子が中学生や高校生にもなるなんて想像もできないみたい。長い目で見られるように支えたいですよね。

中島　例えば、他人の気持ちがわかるようになるっていうのはすごく大事なことですよね。子どもなりに一生懸命考えている。そういうことをお母さんに投げかけると、皆さん、はっとする。今、目の前のことだけじゃないって。慌てなくていいんだというふうな捉え方に変わったりする。

食べることをめぐって

臼井　一番初めに食事のことをおっしゃったでしょう？　今年度もいよいよ幼稚園でお弁当が始まるんですよ。給食も。様子を見ていると、食べさせてもらっているなってわかります。三歳でもね、自分で食べてないなって。それから、座って食べてないなあって。でも、それをストレートに「おうちで座ってますか」とか「自分で食べてますか」って言うと、それはアプローチとしてはだめだってことはわかっている。どういうふうに言いますか？

中島　保育園の四歳でもありますよ。ある程度食べた後、全部食べたくないから、手が膝にあって、ずっと先生の顔を見ているような子。

宮里　そういうことはいちいち親には言わないのが大事なのかな。

中島　子どもがこれから自分で乗り越えることかなって。

高橋　私は園で機会をうかがい、本人に促してみて、少しでもできたら「かっこいいね」など、すかさず声をかけます。周りの子にも「やっぱり年中さんになったから違うわね」と声をかけたりして、その場を成長の場としますね。

臼井　そういうふうに周りの子に声をかける。「○○ちゃん、座って食べててかっこいいね」とか。

宮里　園でしっかり過ごしている様子を見ると、そうすればいいのか、と感じてもらえることがありますね。家では言うことを聞かないけれど、ここで育ててくださってありがたい、と言われたりする。

中島　それがまさにお母さんが成長する姿ですね。あーんと口を開けていた子が自分で食べるようになった、と喜ぶのは。

宮里　伝えていきたいですよね。手づかみで食べることは、食べることへの意欲を引き出す上で大切なんですよ、とか。

中島　食べず嫌いも。「ヤダモン」って言う子に、じゃあどうやって勧めるかっていうのはおうちではなかなか難しいと思う。

宮里　先生の所ではどんなふうにしているんですか？

中島　味や歯ごたえに興味をもてるように一緒に食べます。これはこういう栄養があって早く走れるようになるとか、これを食べると骨がぐんぐん伸びて大きくなるとかの話も。ほかの子どもと「すごくおいしいね」ってそばで食べると、おうちでは一切食べないけれど保育園では味を見てみようかなというようになって。

宮里　お母さんは安心するでしょうね。いざとなれば食べます、みたいな自信がつくのではないかしら。

最後にひと言

高橋　今のお母さんたちは、文字が読めるとか数が数えられるということにはすごく敏感で、成長を急ぎ、心配します。しかし、食べ方や、洋服をきちんと着るといった身の回りの自立には意外に鈍感で、気を使ってほしい順番が逆転しているように感じます。「素直で好奇心旺盛な心を基本に、急がないでゆっくり大きくなってほしい」。それが子どもたちへの願いです。

宮里　文字が読める、数が数えられるといった目に見えることより、もっと大切なものがあるのに。

高橋　「大事なことは目に見えない」のかもしれませんね。『星の王子さま』にもあります

ように……。そして、ゆっくり子どもの成長を見守ることは、待つということですかね。

中島　諦めずに関心をもつことかしら。子どもにもお母さんにも関心をもつ。その人の考えていることとか。その人がどんな人なのかって、関心をもつこと。

臼井　私たち保育者は、子どもによって育てられたっていう言い方をよくするけれど、この保護者と出会ったことで自分が変わったり、保育者として育てられたりっていうのはありますか？　これ、私の園の先生たちに聞いてみたいなって思っています。職員室とかでも、あのお母さん細か過ぎて嫌、みたいな言葉がむやみに出ないようにしたいと思う。

中島　「保護者」とか「母親」というと、役割みたいな感じです。人間と人間の出会いだとさらっと考えて、その人に関心をもつということをしていけば、ちょっと変わってくるのかなあって。

宮里　保護者との懇談会のときに、折り紙やあやとりなどの遊びをしたことがあります。ほんのちょっとの時間なんだけれど、話し合いをしていたときとは違った雰囲気になります。「これ何だったかしら」「あ、それそれ」と、自由な感じで声が飛び交います。「親」という役割の顔の中に「私」の顔が見えてくるような気がして楽しかったです。

中島　子どもって不思議ですよね。公園に子どもを連れていくと知らない人でも声をかけてくれる。子どもと一緒にいると何か世界が広がるっていうか。それと同じように、お母さんと子どもと私たちの関係も膨らむと思う。

（二〇一八年四月二十日）